

平成 30 年度土佐フードビジネスクリエイター人材創出事業(土佐 FBCⅢ) 外部評価結果報告書

外部評価委員会

日 時:平成 31 年3月7日(木)10:30~12:00

場 所:高知大学農林海洋科学部1号館2階大会議室

評価対象:土佐 FBCⅡ期間(平成 25~29 年度)を踏まえた、ミッションステートメント達成状況、外部評価指摘事項対応状況、土佐 FBCⅡ諸活動全般、並びに土佐 FBCⅢ(平成 30 年度)の発足について

評価方法:土佐 FBCⅡ自己評価書、土佐 FBCⅢ進捗報告書に基づき、外部評価委員会にて面接評価

評価委員:木村 雅和 委員長(静岡大学副学長/理事(研究・社会産学連携担当))

松岡 哲也 委員(公益財団法人高知県産業振興センター理事長)

森 尚美 委員(株式会社遠藤青汁高知センター取締役専務)

森 久世司 委員(一般社団法人四国産業・技術振興センター産業振興部部長)

1. 外部評価の趣旨

土佐 FBC における、平成 25 年度外部評価では、平成 20 年度から平成 24 年度までの文部科学省「科学技術戦略推進費」の補助を受けた 5 年間(土佐 FBCⅠ)の活動、及び平成 25 年度からの高知県寄附講座及び金融機関等から資金提供を受け自立化がはかられ継続した事業(土佐 FBCⅡ)の初年度(計 6 年間)における活動が対象とされた。その評価項目は『1.活動の実績及び効果、2.活動の内容及び方法、3.実施体制、4.改善のための活動』の 4 つの区分からなり、様々な事項に対し指摘を頂いた。

平成 26・27 年度外部評価においては、平成 25、26 年度外部評価を踏まえ、「外部評価での指摘事項をどのように改善に結びつけたか」、また土佐 FBCⅡの根幹である「ミッションステートメントの達成見通し」に係る部分を中心に、土佐 FBCⅡ企画運営室が作成する自己評価書に基づき書面評価による外部評価を実施したところである。指摘事項は累計で 21 件におよび、土佐 FBCⅡの発展・機能強化をはかるうえ、かつ土佐 FBCⅢを検討するうえでの重要な指針となっている。

平成 28 年度外部評価においては、平成 30 年度以降の事業(土佐 FBCⅢ)の在り方について、これまでの実績を踏まえつつも、新たなビジョンやコンセプトに基づき、再スタートを切る必要があることから、“地方が実施する食品産業人材育成事業の在り方”についてご意見を賜る場として、「土佐 FBCⅢビジョン懇談会」を東京と高知の 2 会場で開催した。外部評価とビジョン懇談会の主旨とが合致するため、「土佐 FBCⅢビジョン懇談会」をもって充てることとした。ビジョン懇談会で有識者より出された意見等を参考に、土佐 FBCⅡ企画運営委員会でも議論を重ね、土佐 FBCⅢ事業概要案を取りまとめた。

土佐 FBCⅡ外部評価をもとに新設した土佐 FBCⅢにおける BB コースおよび S コース(平成 31 年

度開講)の概要も含め評価を実施する。また、平成 29 年度は土佐 FBC II 最終年度であることを受け、土佐 FBC II が掲げるミッションステートメントが達成できているかどうか最大の観点となるが、ミッションステートメントの一つである経済効果の把握は、翌年度(平成 30 年度)に実施する修了生へのアンケート調査等をもってデータ収集と検証が可能となる。このことから、土佐 FBC II における最終的な外部評価は、土佐 FBC II の全成果を踏まえた事後評価として位置づけ、平成 30 年度に実施していくこととする。この第 II 期を総括する外部評価を通じて、今後の土佐 FBC 事業のさらなる発展と強化を目指していくものとする。

2. 外部評価委員会概要

土佐 FBC III 企画運営室が作成した土佐 FBC II 自己評価書、土佐 FBC III 進捗報告書を事前に委員の方へ送付し、予めご評価いただいたうえで、委員会当日、石塚事業責任者によるプレゼンテーションにより、土佐 FBC II 総括と土佐 FBC III の進捗について説明が行われた。その後、委員と FBC 教員の間で質疑応答が行われ、最後に委員それぞれの観点より講評いただいた。

3. 評価委員からのコメント

主な意見は以下のとおり。

土佐 FBC 諸活動全般について

<評価できる点>

- 受講生の業種や経歴は、食品加工業を中心に一次産業、パッケージ関係、起業されたい方、学部生など多種多様であり、このような受講生の多様性から、過去 10 年間の本プログラムの裾野を広げる取り組みの成果を感じる。
- 受講内容については、基礎的な部分をしっかりとしたうえで、受講生の学会での発表や、新しく事業展開されるケースもあるということから、カリキュラムの内容が非常に充実されていると評価できる。

<今後の課題点>

- 事業の取り組みの認知度が低い現状であり、広報について力をいかなければならない。紙媒体だけではなく、Facebook 等の SNS 関係も取り入れているが、まだまだ不十分である。
- 食のプラットフォーム事業は、地産地消、販路拡大の視点が非常に大きく、FBC の修了生が集まりにくくなっているという印象である。FBC 倶楽部を盛り上げるためには、3 つの部会をしっかりと動かしていくことが一つのポイントである。
- 専門性が食品関係だけではなく、多様化してきているように感じる。土佐 MBA との連携をより密なものとし、それぞれの良いところをうまく利用していただきたい。
- 外回りをしての営業は、企業支援を行う中で重要である。受講生の確保だけではなく、修了生のもとへしっかりと足を運び、人間関係が希薄にならないように努めるべきだと思う。

- 運営費交付金の削減により、学内的に教育研究の部分への予算配分が現実厳しくなっている。今後も本事業への学内的な理解をいただくため、大学としてどのように社会貢献につながっているか、成果を示すような地道な活動が必要である。将来的には、大学経営の面でも重要な仕組みまで持っていけば、素晴らしいモデルになれると思う。
- 県の産業振興計画では、県内に企業がしっかりと残り、そこへ若者が就職することが重要である。その中で、県や産業振興センター、FBC などがそれぞれの役割分担を明確にし、精度を上げていけば、最終的には若者が残る高知県として非常にいいものになると思う。
- 財源の確保は非常に深刻な問題であり、民間の方からどれだけ支援いただけるかが課題である。来年度は、本年度より財源を増やさなければ継続は困難である。

土佐 FBCⅢの発足について

<評価できる点>

- 高知県は製造業が少なく、大きな食品工場を営まれている方も少ない。研究にかける時間や企業に研究室を持つことが難しい状況である。その中で大学が支援し、大学に来れば研究ができる、専門の人がいるという環境づくりは非常にありがたく、ぜひ実現していただきたい。
- 本年度より受講料がこれまでの 3 倍に金額が上がり、金銭面でハードルが高くなっているが、今回の話を聞いてそれほど高い金額には感じなかった。講師も変わり、どうなるか分からなかったが、実際に事業が走ってみれば実のある素晴らしい活動をしているように見えた。

<今後の課題点>

- S コース修了後は、共同研究を大学や工業技術センターと密接に行い、さらにイノベーションを創出できるようなプログラム作りを行っていく。
- 個人負担でも企業負担でも基本的には企業からの応援がなければ、受講生の人材も育たない。先行的な取り組みとして、事業戦略を取り入れた中で、企業の経営者の意識を変え、協力いただけるような土壌を作るような取り組みが重要である。受講生は多様な経歴の方が来られるということもあり、企業の経営者の方ともお話し、会社としての位置付けを明確にしてもらうような働きかけをする。
- 事業戦略を作成する中で、企業の経営者の意識も変わり、社員のモチベーションを向上していくが、その分時間も非常にかかるということも頭に入れておいていただきたい。
- S コースでのゼミ形式について、受講生の多種多様なニーズがある中で全てに応えていくのは、人数的に 1 講師への負担が大きくなる。1 年目は 8~10 名を受入れ、1 教員あたり 2 名位の体制で行うが、2 年目以降については、現場と相談しながら考えていかなければならない。
- S コースの中で事業戦略を作り、会社としてより研究がしたいという希望があれば、修了後さらに大学院(夜学のコース)という形で仕事をしながら学び、修士課程も取得できるような環境づくりを目指す。
- 受講生は時間を割いて講義に来ている。S コースの活動をする際には、受講生の企業の売り上

げが1円でも上がるということも一緒に考えて主軸とすれば、本当にありがたいものになると思う。

- 受講の対象者が多岐に渡るのであれば、大学に来ればこのような環境があるということを示すという意味でもネット受講利用を検討すべきである。県との移住政策とも連動しながら、県外の方でもネットで受講が出来る方法を検討する。

4. 講 評

- 概ね十分地域に貢献できている。今後は、研究開発拠点を大学の中へ整備し、地域の様々な人がそれぞれの企業活動に有効に利用できる拠点となっていければよい。
- 試行錯誤で大変な取り組みをしていると思う。高知県にある経営企業約500社を巻き込んだ取り組みとしていけば、より力強い事業になると思う。ぜひ頑張ってください。
- 企業の売りに貢献できる組織、そういった思いを一緒に持って取り組んでいる場所としてこれからも継続して取り組んでもらいたい。今後に期待している。
- 本事業を自走し、今後も継続させていくためには組織作りはもちろん、地域の方から尊敬され、必要だと思われるような人材を育てていくことが重要であり、今後とも努力してもらいたい。